

留学生のレポートにおける 「メタ言語表現」の使用実態 ——韓国語を母語とする学習者のレポートを対象に——

永谷 直子

1. 問題の背景

日本の高等教育機関における留学生は、人文科学、社会科学の分野が最も多く、この2分野で6割以上を占めている（JASSO 2021）。これらの分野で学ぶ留学生が日本で研究活動を行うためには、日本語の文献を読み、レポート・論文を執筆する必要がある。高等教育機関における留学生向けの日本語の授業では、彼らのレポート作成上の困難点を的確に把握し、サポートしていくことが求められる。そのためには、母語話者と学習者の間のレポート作成上の相違を的確に捉える必要があるだろう。

レポート作成を含むアカデミック・ライティングは大きく「文体（アカデミック・スタイル）」、「言語表現」、「内容・構成」の3点の指導がなされる。このうち、「言語表現」について検討を要する項目として、論理を展開するのに必要な表現が考えられる。清水（2009）は、論理を展開するためには、従来指摘されてきた語句（例：～によって、したがって、すなわち）に加え、「メタ言語表現」（例：これから～について述べる／ここで4つ例をあげよう等）が必要であることを指摘している。

アカデミック・ライティングのための教材である浜田他（1997）は、論文におけるこのメタ言語表現の役割を指摘している。浜田他（1997）はこのメタ言語表現に類するものを、「行動（Action）を述べる文」とし、その例として以下を挙げている。

- (1) 本稿では、セットメニュー方式とカフェテリア方式をいくつかの点から比較する。
- (2) ここでは、経済性の観点から二つの方式を検討しよう。

- (3) 本稿ではセットメニュー方式とカフェテリア方式とどちらが優れているかを分析してきた。

浜田他(1997)は、論文には「事実(Fact)を述べる文」、「意見(Opinion)を述べる文」「行動(Action)を述べる文」の3種類が用いられるとした上で、その役割について以下のように述べている。

「行動を述べる文」があることにより「ここではこういうことについて述べるのだな」あるいは「これからが本論だな」などということが読む人にも伝わり、論文の組み立てがよりわかりやすくなる。

このように、レポート・論文においてはメタ言語表現の役割が大きいことが指摘されてきたが、学習者は自身の日本語のレポートのなかで、これらの表現をどのように使っているのだろうか。母語話者の使い方との間に相違はあるのだろうか。本稿はレポート執筆の必要がありながら、経験の浅い学習者である、文系学部1年生の留学生4名のレポートについて、レポート内のメタ言語表現に着目し、その実態を考察する。

2. 論文におけるメタ言語表現

杉戸・塚田(1991)は、「表現主体がいま行おうとする(ないし、いま行ったばかりの)言語行動について、その言語行動としての種類や機能を明示的に表現するもの」をメタ言語表現と呼び、専門的文章として月刊雑誌『言語生活』の巻頭論文約400本を対象に、その現れ方を検討している。用例の採集にあたっては、以下の基準が示されている。

- (4) ①文章記述の言語行動を意味する動詞に注目する。「言う」「述べる」「まとめる」「付言する」「紹介する」
②文末表現として、書き手の意志的な言語行動を表現するものに注目する。「述べてみたい」「まとめようと思う」「例を挙げることにする」
③その言語行動の主体は論文の書き手自身であること。

杉戸・塚田(1991)は、こうした基準によって抽出された表現は、「著者自身が論文のなかでいまだどのような言語行動をしているか、あるいはその論文のなかでどのような言語行動をしようとしているかを説明や宣言の形で明示する表現」であるとしている。一方、以下については採集対象としていない。

- (5) ①その論文の範囲を超えて、今後の希望や将来の展望を述べる表現

例 「日本語の新しい綴字法を考えて見たいものです」

- ②読み手への依頼表現

例 「次の詩を見てもらおう」

- ③章や節の標題

例 「まとめ」「しめくくり」「論点の提示」など

これらの基準によって抽出した921例につき、文末形式、文末形式に先行する動詞、出現位置の分析がなされている。このうち、文末形式に先行する動詞を分析するなかで、論文におけるメタ言語表現の類型として以下の5つの型が挙げられている。

- (6) ①そこで扱おうとする話題内容に明示的に言及する表現（その言語行動

の動作そのものを取りたてて明示するのが主目的ではないような表現）「ここでは～について話す」「～を分析する」「ここでは～に触れる」「本論では～について考察する」「この稿では～を追う」「ここで～を指摘する」など

- ②論文の文章としての流れや構成にかかわる言語行動に言及する表現

「～から話を始める」「次に～に移る」「本題に進む」「これで切上げる」「稿を終える」「～をまとめる」など

- ③文章を構成する作業の単位としての言語行動に言及する表現「例を挙

げる」「～を引用する」「言い足りない事を補う」「原文のまま掲げる」「～を計算する」「～について付け加える」「一例を抜き出す」など

- ④作業単位を含む論文構成への言及（②と③の混成）「例をあげて説明す

る」「実例を挙げながら考えて見る」など

- ⑤読者や関係者への対人的な配慮としての〈あいさつ〉的な言語行動に

ついての言及「～に触れ得なかったことをお詫びする」「厚くお礼申し上げます」など

杉戸・塚田（1991）は、論文におけるメタ言語表現として動詞の種類、文末表現、（論文内の）出現位置、機能といった全体像を明らかにした点で大きな意義のあるものである。

一方、清水（2009）は、杉戸・塚田（1991）においては、動詞、文末、出現位置のそれぞれが独立して調査されているために、それぞれの要素の相関

性が明らかになっていないとする。清水（2009）は、杉戸・塚田（1991）のメタ言語表現の5類型（本稿における（6））の①を「話題内容を表すメタ言語表現」、②～⑤を「方向づけを表すメタ言語表現」とした上で、人文系論文50本を調査対象として、これらの出現位置や文末形式の特徴を示している。調査の結果として、序論や結論では「話題内容を表すメタ言語表現」、本論では「方向づけを表すメタ言語表現」が多くその表現に多様性があることを示している。

以上、論文におけるメタ言語表現の先行研究を概観した。上記2本により、メタ言語表現の定義や分析の観点は明らかにされたものの、いずれも、日本語母語話者による論文を調査対象としており、そこに見られる特徴が、留学生にとっていかなるものであるかは明らかになっていない。本稿では、上記2本の観点を念頭に置いた上で、留学生が実際に書いたレポートにおけるメタ言語表現を調査し、実態を明らかにしていくこととする。

3. 調査対象と手法

本稿における調査の目的は、1で述べたとおり、母語話者と学習者の間のレポート作成上の相違を的確に捉えることにある。学習者、母語話者のレポートとして以下を調査対象とした。

学習者によるレポートは、2021年度秋冬学期に東京都内の大学で開設されたレポート作成を目的とした上級日本語のクラスにおいて、人文科学、社会科学を学ぶ留学生が執筆したレポート4本を対象とした¹⁾。4名はいずれも韓国語母語話者で、学部1年生である。授業は、期間内（全13回）に3000～5000字程度のレポート（テーマは自由）を完成させることを目的とし、オンラインで行われた。履修者は、期間内にレポートを部分的に提出し、履修者相互、あるいは教員によるフィードバックを受け、執筆と修正を繰り返しながら完成させていくという方式で行われた。本稿の執筆者はこの授業の担当者である。修正を経たかどうかは問わず、最終的に提出されたものを対象としている。以下、これらを「学習者レポート」と呼ぶ。

母語話者によるレポートは、学習者と同様の形態、同分量であるレポートとして、アカデミック・ライティングのための教材に掲載されたサンプルレ

ポート3本を対象とした。サンプルレポートはいわば「理想」を描いたものであり、実際の母語話者のレポートの実態を反映しているかは確実ではない。しかしながら、いずれの教材も大学学部生のレポートを念頭に置いたものである点で、2で挙げた先行研究が調査対象とした「論文」よりも、留学生が大学生活のなかで実際に接し、執筆していくレポートに近いものであると判断し、考察対象とした。以下、これらを「母語話者レポート」と呼ぶ。

本調査の学習者レポート、母語話者レポートの概要は以下のとおりである。

表1 調査対象とした「学習者レポート」の方法²⁾

レポートタイトル (略称)	文数	文字数	形態素数 ³⁾
新型コロナウイルス危機に伴う経済的格差の拡大 (格差)	86	5,122	3,352
水際対策によって日本に入国できない留学生たち (留学生)	133	8,765	4,512
新型コロナウイルス以後に始まったオンライン授業の現状と実効性について (オンライン)	77	4,968	3,042
新型コロナウイルスの拡散による経済的影響の明暗と原因分析 (経済的影響)	68	4,744	3,279
総数	364	23,599	14,185

表2 調査対象とした「母語話者レポート」の概要⁴⁾

レポートタイトル (略称)	文数	文字数	形態素数
大学卒業者を中心とした現代の若者の働き方 (働き方)	108	5,591	3,595
養殖の自家汚染と環境負荷をいかに軽減するか (養殖)	61	4,188	2,408
容器包装プラスチックごみの現状と減少への取り組み (容器)	60	4,011	2,419
総数	229	13,790	8,422

ここでは、これら7本に関し、〔1〕動詞の種類、〔2〕文における出現位置の2点を調査する。〔1〕は、杉戸・塚田(1991)、清水(2009)が共に行っていたものである。ここでは、杉戸・塚田(1991)の採集の基準(上記(4)(5))に従い、その言語行動の主体が論文の書き手自身である((4)の③)動詞を抽出した。なお、(5)①では「その論文の範囲を超え」た表現として、

「今後の希望や将来の展望を述べる表現」が挙げられているが、本調査では、自身が過去に行った調査等の研究行動について述べる表現も同じくその「その論文の範囲を超え」た表現として対象外とした。具体的には(7)のようなものである(例文の()内には学習者、母語話者の別とレポートタイトルの略称を示している)。(7)はレポート執筆以前に行ったアンケート調査について述べた文である。

- (7) つまり、自由回答の質問はオンライン授業の現状が分かるデータを収集し、選択肢のある質問は実効性に対するデータを収集することを狙って設定した。(学習者・オンライン)

〔2〕文における出現位置とは、主節の述語であるか、従属節の述語であるかを意味している。従属節のメタ言語表現については、清水(2009)では対象外とされており、杉戸・塚田(1991)では採集対象であるものの、調査結果では主節か従属節かは区別して記述されていない。レポートにおいてメタ言語表現がどのように用いられているかを考えるにあたっては、この実態も明らかにする必要があると考え、本稿では調査を行った。

4. 調査結果と分析

本節では、調査結果を順に示していく。まず、学習者レポート、母語話者レポートにおけるメタ言語表現の数を表3に示す。3節で示したとおり、学習者レポートと母語話者レポートでは分量が異なるため、実数では比較ができない。ここでは形態素数に順じて、10,000語(10,000形態素)あたりの数を算出した上で比較し、カイ二乗検定でその差を確認した。表3のとおり、学習者のメタ言語表現の使用数は母語話者より多い($\chi^2(1) = 23.092, p < .01$)。

表3 学習者レポート、母語話者レポートにおけるメタ言語表現の数

	メタ言語表現の実数	一万語あたりの数
学習者	132	93.06
母語話者	32	38.00
総計	164	72.54

次に、〔1〕動詞の種類の検討のため、学習者レポートと母語話者レポートの合計7本のレポートでメタ言語表現として使用された動詞の一覧を表4に示す。このうち、学習者レポートにおける使用の多かった語を、上位語として表5に示す（下線については後述）。

表4 メタ言語表現として使用された動詞一覧

明らかにする, 挙げる, 扱う, 表す, 言い換える, 言いきる, 言う, 得る, 行う, 確認する, 期待する, 加える, 懸念する, 言及する, 検討する, 考察する, 試みる, 探す, 示唆する, 指摘する, 示す, 収集する, 主張する, 紹介する, 上述する, 調べる, 説明する, 前述する, 対象にする, 注意する, 注目する, 提案する, 定義する, 取り上げる, 取り出す, 述べる, 比較する, 否定する, 評価する, 踏まえる, 分析する, 見える, 認める, 見る, 明確にする, 目標にする, 模式化する, 用いる

表5 学習者レポートのメタ言語表現における動詞の上位語

順	動詞	学習者			母語話者		
		実数	一万語あたり		実数	一万語あたり	
1	言う	18	12.69	13.64%	1	1.19	3.13%
2	見る	15	10.57	11.36%	8	9.5	25.00%
3	確認する	12	8.46	9.09%	0	0	0
4	分析する	11	7.75	8.33%	0	0	0
5	紹介する	7	4.93	5.30%	0	0	0
6	比較する	6	4.23	4.55%	0	0	0
7	述べる	6	4.23	4.55%	3	3.56	9.37%
8	説明する	5	3.52	3.78%	0	0	0
9	検討する	5	3.52	3.78%	0	0	0
10	考察する	5	3.52	3.78%	2	2.37	6.24%
動詞全数		132	93.06	100.00%	32	38.00	100.00%

表5に示したとおり、学習者レポートでメタ言語表現として最も多く使われていたのは「言う」であり、「言う」の使用は、学習者が母語話者より多かつ

た ($\chi^2(1)=9.308, p<.01$)。二番目に多い「見る」は母語話者の使用も多く、学習者と母語話者の間の差は大きくなかったが、「言う」は母語話者の使用が少なく、学習者の特徴語と言ってよいだろう。そのほか、「確認する」、「分析する」、「紹介する」、「比較する」など今回の調査では母語話者の使用は見られなかった。「言う」の他にも発話に関する語の使用は学習者に顕著に多い。ここでは「言う」「述べる」のいずれかを含む語を発話に関する語として、表4で下線を付した。発話に関する語の使用数を表6に示す。「発話に関する語」は「言う」と同様に、学習者レポートに顕著である。発話に関する語は学習者の使用が多い ($\chi^2(1)=13.370, p<.01$)。また、メタ言語表現の総数における発話に関する語が占める割合にも差があり、母語話者は12.50%であるのに対し、学習者は24.99%である。

表6 学習者レポート、母語話者レポートにおける「発話に関する語」の数

動詞の種類	学習者			母語話者		
	実数	一万語あたり		実数	一万語あたり	
発話に関する語	33	23.26	24.99%	4	4.75	12.50%
メタ言語表現の総数	132	93.06	100.00%	32	38.00	100.00%

以上、学習者と母語話者のレポートでは、メタ言語表現の数に有意に差があり、学習者が母語話者を大きく上回っていること、動詞の種類としては、「言う」を含めた「発話に関する語」が顕著であることを明らかにした。

続けて、〔2〕文における出現位置の調査結果を以下に示す。文における出現位置として、主節の述語であるか、従属節の述語であるかを調査した結果を表7に示す。

表7 メタ言語表現の文における出現位置

文における 出現位置	学習者			母語話者		
	実数	一万語あたり		実数	一万語あたり	
主節	66	46.53	50.00%	17	20.19	53.13%
従属節	66	46.53	50.00%	15	17.81	46.87%
総数	132	93.06	100.00%	32	38.00	100.00%

表7に示したとおり、学習者、母語話者ともに主節と従属節はほぼ同数用いられている。メタ言語表現を考える際には、従属節も含めた考察をする必要があることを示している。

このうち、従属節の種類においても、学習者と母語話者では異なる傾向が見られた。総数の上位5種を表8に示す。

表8 メタ言語表現の用いられた従属節の種類

従属節の種類		学習者			母語話者			総数		
		実数	一万語あたり		実数	一万語あたり		実数	一万語あたり	
1	と節	21	14.8	31.81%	2	2.37	13.31%	23	10.17	28.39%
2	て節、 連用中止節	16	11.27	24.23%	6	7.12	39.98%	22	9.73	27.16%
3	名詞節、 連体修飾節	13	9.16	19.69%	3	3.56	19.99%	16	7.07	19.74%
4	ように節	3	2.11	4.54%	1	1.18	6.63%	4	1.76	4.91%
5	ながら節	4	2.81	6.04%		0	0.00%	4	1.76	4.91%
6	ば節	3	2.11	4.54%	1	1.18	6.63%	4	1.76	4.91%
従属節の総数		66	46.52	100.00%	15	17.81	100.00%	81	35.82	100.00%

従属節のうち、学習者の使用が最も多かったのは、「と節」であった。以下はその使用例である。

- (8) 図1のジニ係数を確認してみると、2008年以降、日本の当初所得ジニ係数は上昇していることがわかる。(学習者・格差の拡大)

- (9) 言い換えると、オンライン授業は対面授業にくらべ、授業の内容に対する復習が容易であると言えるはずである。(学習者・オンライン)

一方、母語話者の使用が最も多かったのは「て節、連用中止節」であり、学習者の使用との間に、有意な差はなかった ($\chi^2(1)=0.889, ns$)。以下はそれぞれの使用例である。

- (10) 以下の考察では、まず2節でオンライン授業の評価に対する一つの先行研究を紹介してこの研究と今回のアンケートの相違点について説明する。(学習者・オンライン)

- (11) 本稿では、養魚を中心とした養殖漁場の環境を明らかにし、和歌山県水産試験場の取り組みを考察する。(母語話者・養殖)

以上、メタ言語表現の文における出現位置の調査結果を示した。母語話者、学習者共に、従属節におけるメタ言語表現は全体の半数近くを占めているが、従属節の種類には以上のような違いが見られ、メタ言語表現を使用する意図も異なることが予想される。特に顕著な違いが見られた「と節」については、その用法や従属節内の述語動詞の種類との相関を検討した上で、学習者が多用する理由を検討することが今後の課題になる。

5. まとめ

本稿では、韓国語を母語とする留学生（文系学部1年生）4名のレポートにおけるメタ言語表現の使用実態について、母語話者のレポートと比較しながら考察した。今回の実態調査により、母語話者と学習者のメタ言語表現の間に以下の相違があることを明らかにした。

- ・学習者のメタ言語表現の使用は、母語話者を大きく上回っている。メタ言語表現で使用する動詞の使用傾向も異なり、学習者は「言う」を含めた「発話に関する語」の使用が顕著に多い。
- ・学習者、母語話者ともに従属節におけるメタ言語表現は全体の半数近くを占めているが、従属節の種類には異なる傾向が見られる。学習者は「と節」の使用が顕著に多い。

1節で述べたように、従来の教材においては、レポートにおける「行動を表す文」の意義が示されてきた。実際に、メタ言語表現は「論文の組み立て」を「よりわかりやすく」するものであり、メタ言語表現は読み手に対する配慮を示す一つ的手段であると言えるだろう。しかしながら、今回の調査では、学習者のメタ言語表現に多用とも言える傾向が見られた。

その多用から生じる懸念の一つとして、“Writer/Reader visibility”（談話参加者の存在の明示度の関係）の高さが挙げられる。伊集院・高橋（2004）は“Writer/Reader visibility”を「書かれた文章において書き手や読み手の存在が言語表現として示される度合い」とする。その上で、「中国人日本語学習者は相手に向かって話しかけているような表現を多用している」との経

験的直感の妥当性を、作文（意見文）コーパスを対象に文末のモダリティの分析をすることで、検証している。分析の結果として、中国人日本語学習者に「べきだ」のような「評価のモダリティ」の使用が多いことを示し、それが中国人学習者の作文の“Writer/Reader visibility”を大きくする要因の一つであることを指摘している。

本稿で考察としたメタ言語表現は、その動作主体がレポートの書き手であり、その使用により書き手の存在が示されることになることから、“Writer/Reader visibility”（談話参加者の存在の明示度の関係）に関与する表現であると言えるだろう。一方、レポートとはより客観的な記述が求められるものであり、書き手の存在の明示度が高いことが、「レポートらしさ」の弊害となる可能性もある。

本稿は実態調査の結果として傾向を示したにすぎず、その細部の検討には至っていない。今回の調査に見られた傾向について詳細をさらに検討することで、教室においても、メタ言語表現の使用を単に勧めるのではなく、適切、かつ、効果的な使用を示すことが可能になっていくだろう。今後は、動詞の種類、従属詞の種類の母語話者・学習者間の相違をさらに考察するのに加え、文における出現位置にとどまらず、レポート全体における出現位置を検討することで、今回見られた傾向の持つ意味を検証していく必要がある。また、本稿の調査は韓国語を母語とする学習者によるレポートに限られたものである。この調査結果が韓国語を母語とする学習者特有のものであるかどうかは、他の言語を母語とする学習者と対照することで明らかになる。学習者の母語との関わりに留意した上で、今後も検証を進めていきたい。

【注】

- 1) 授業内で執筆した文章、提出した文章が研究・教育目的で利用・公開されることの承諾を得ている。
- 2) 表1、2における「文数」「文字数」「形態素数」はいずれも、タイトル、クラス名、学籍番号、氏名等の情報、参考文献は除いた数である。「文数」は句点の数を集計したものである。
- 3) 総形態素数は形態素解析支援ツールである「web茶まめ」(<https://>

chamame.ninjal.ac.jp/) を使用して算出した。「web 茶まめ」は解析用の辞書として各種の UniDic、形態素解析器として Mecab を利用している。

4) 各レポートの出典は以下のとおりである。

(働き方)：二通信子・佐藤不二子 (2003) 『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

(養殖)：石井一成 (2011) 『ゼロからわかる 大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社

(容器)：二通信子・佐藤不二子 (2020) 『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

【参考文献】

- (1) 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末のモダリティに見られる “Writer/Reader visibility” —中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123, p.86-95, 日本語教育学会
- (2) 清水まさ子 (2010) 「論文におけるメタ言語表現について—メタ言語表現と論の展開とのかかわり—」『NEAR conference proceedings working papers』p.2-15, 国際大学
- (3) 杉戸清樹・塚田実知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合—」『国立国語研究所報告103, 研究報告集12』pp.131-164, 国立国語研究所
- (4) 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (2021) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2022/03/date2021z.pdf
- (5) 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版

(本学准教授)